
とある、夏休みのデキゴト

灰音 四音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある、夏休みのデキゴト

【Nコード】

N5196Y

【作者名】

灰音 四音

【あらすじ】

夏目、新条と鹿島、そしておれ。いつもの四人が公園に集まり、これからなにをするか話し合う。そこで出た肝試し案。全員がそれに乗り、旧校舎へ繰り出すおれたち。だが、そこで見たものは一生忘れらなくなった。

これはある日の夏の出来事。

これは、ある日の夏の秘め事――

プロローグ（前書き）

短期集中連載

おそらくすぐ終わると思います
息抜きだから、生易しい目で見てくださいね？

それでは、どうぞ！

プロローグ

これは夏休みのある日の話。ここ最近はどうだるように暑くて、バリバリ君のソーダ味をいくつ食べても足りないほどだった。

「あちー……」

夏目が呟く。おれ、新条、鹿島もそれに同調し頷いた。おれ達四人はいつものように町内にある小さな公園に集まり、思いもいに遊んでいたのだが、日が高くなり、その元気もどん取んなくなっていく。「ここ最近、やってることが同じな気がするよね」

新条が言った。

確かに最近のおれ達は公園に集まり水道で遊ぶといったことばかり。これじゃあネンマリしてくるし、やる気もなくなっていくのは当たり前だと言える。

「じゃあ、さ。肝試したのはどう？」

「それいいな！ どこでやる？」

「夜に出かけるの？ それはちょっと——」

鹿島の発言に元気になった夏目と、怪訝な表情の新条。二人の性格が現れるなど、おれはそれを笑いながら見ていた。

「近々取り壊される旧校舎、あるでしょ？ あそこでやろうよ」

さらに表情が曇る新条。何か納得がいかないらしい。

「行くことは構わないけど、入っていいのかな。旧校舎って立ち入り禁止じゃなかったっけ？」

「あー……」

夏目のテンションが下がり、またグタツと力が抜ける。ガキか、お前は。

「ほら夏目。そんなところで転がるな、汚い」

「相変わらずのオカンがいるぞー、ここにオカンがー」

軽く頭をはたき黙らせる。オカンって言われるの嫌いだって知っているくせに言うのだから、性質たちが悪い。

「多分学校に許可もらえれば入れるさ」

鹿島が軽く笑った。夏目は二人の攻防を黙って見守っている。おそらく彼は肝試しに行きたいのだろうが、新条が行きたくないと言えば、おそらく別のことを考える、そういう奴だ。

「だけど、夜に出かけるんだろ？ それを親が許すと思うか？」

「新条さ、別に無理に来なくても平気なんだよ？ これはただの提案で、強制じゃないし。ただ面白そうだって思っただけ。いやならそう言ってくればいいのに」

「別にいやではないけど……」

「ならどうしてそこまで拒むのさ」

不思議そうに呟いた鹿島。その言葉に新条の顔は赤くなったり青くなったりと、まるで信号のように色が変わっていく。それを眺めながらニヤニヤしているおれと夏目。

静かな公園に響くセミの声。遠くの方から車のクラクションが聞こえた。

「笑わないでくれよ？ その、そういう系統が苦手——なんだ」

初めて知った。思わず口からこぼれた言葉。新条に怖いものはないんだと、苦手なものなんか無いものだと思っていたから、意外で仕方ない。鹿島は口元に笑みを浮かべ、夏目は「ほー？」と気の抜けた声を出す。

「別に、ボクは笑わないけど？」

と、鹿島。

「お前も苦手なものあったんだなあ」

と、夏目。

「う、うるさいなあ！ だから笑うなって言っただじゃないか！！君も、口元笑ってる！」

「笑ってないじゃないか、おれにも罪をかぶせるなよ」

静かだった公園が夏目と鹿島の笑い声で満たされる。その笑い声を必死になって止めようとする新条。微笑ましい。

やっと夏目と鹿島の笑いが収まった。新条は顔を真っ赤にして

俯いている。

「さて、これだけ笑ったからには、旧校舎で肝試しをすること決定だな！」

意味が分からない夏目論が飛び出し、結局おれたちは明日の夜肝試しをすることに決まった。

これが、全ての始まりだと、その時は誰も、気がつかなかった。

夜。月がきれいに浮かんでいる。おれは一人、旧校舎前に立っていた。待ち合わせの時間15分前。少し早めに出てきたのが裏目に出たようだ。一人で誰かを待つと言うのは、寂しいな。ケータイを指でいじり、開いたり閉じたりを繰り返す。

「待つの、飽きた」

「そりゃ悪かったな！」

独り言に返事が返ってきたことに驚き振り向けば、夏目、新条、鹿島の三人が仲良くこちらに歩いてきている。

「なんだ、おれだけのけ者か」

その言葉に鹿島は少しむっとした表情になり、おれのことを軽くこずいた。

「こんなに早く行っちゃうとは思って無かったんだよ。迎えに行ったらもういないって言われて驚いたんだからね！」

悪い、と笑いながら言えば、謝ることじゃないよ、と鹿島。夏目たちももう隣にいて、いつでも肝試しが始められる状態になった。

おれたちは自然と、旧校舎を見上げる。

木造の建物はあちらこちらペンキがはげ、ひどいところはガラスも割れている。四階建てのその建物は月を背にして、おれたちを威嚇しているように見えた。誰かののどが、なった。おれのだったかもしれないし、新条や夏目たちかもしれない。とにかく、おれたちは旧校舎に威圧されていた。

「雰囲気、やべーな」

へへ、と夏目が笑う。彼は絶対楽しんでる。鹿島は静かに口元に弧を描き、新条は不安そうに眉を寄せ、おれは無言で見つめるだけ。

——みんな個性的だな。おれが言えたことではないが。

さて、と夏目がおれたちに向き合う。

「ルール確認といこうか」

にやりと、彼の口角が上がった。

ルールは簡単。懐中電灯を持ち旧校舎四階一番端にある第二音楽室に向かい、ピアノの一番低い音を四回鳴らす、というもの。至極単純明快なのだが、問題がひとつ。

「なあ、本当に一人じゃなきゃだめなのか？」

震える声。確かに、新条にとっては地獄だろうな。こういう系統が苦手だと、言っているのだし。

「当たり前だろうが！ 何が寂しくて男二人で旧校舎なんか歩くんだよ。俺は可愛い女の子と歩きたい！！」

と、夏目。お前はバカか。

「あはは！ ここは立案者のボクが行ってくるべきかなあ？」

と、鹿島。確かに一理あるとおれが頷けば、ほかの二人も行つてこいとはやしたて始める。お前らは小学生かと、ため息と苦笑が漏れた。

懐中電灯を渡し、何かあればすぐにケータイで連絡するんだぞと言つと、「でた、オカンスイッチ」と笑われてしまった。

「誰がオカんだ。おれはお前が怪我しないか心配なだけだぞ」

「あんがと」。じゃ、行つてくるよ」

片手を振りながら、鹿島が旧校舎に消えていく。その後姿をおれたちは見送った。

「さあて、何か出るかなあ」

「や、やめろよ！　そういうことを言うんじゃない！！　本当に出たらどうするんだよ！？」

「だから、それが楽しいんだろ？」

——明らかに夏目が新条をからかっている。呆れる。夏目はなにが楽しいのだろう。

と、二人がいい争いしているうちに四階の窓から懐中電灯の光が見えた。——鹿島だ。

その光は、ゆっくりと廊下の端に進んでいくのが見える。いつの間にか二人も静かになっていて、鹿島の光を目で追っていた。

「あ——」

あることに気が付いてしまったおれは、声を漏らしてしまった。耳ざとくそれを聞いた夏目が、ニヤニヤした顔でなんだ？　と聞いている。

「いや、大したことじゃないんだが……。四人で四階にある音楽室のピアノを四階鳴らすって、4ばかりで不吉だなあと、それだけさ」なるべくなんでもない、と言う顔を作って答える。おれの言葉には、誰も答えなかった。

鹿島の懐中電灯の光が、四階の一番端についた。ギギギイーツといやな音を響かせながら、その光は音楽室に入っていく。横からのどを鳴らす音が聞こえた。——新条だ。

ポーン

一回目のピアノの音が響く。

ポーン

二回目。

ポーン

三回目。

だがいつまで経っても四回目はならない。三分待っても、五分待っても、十分待ってもならない。さすがに三十分経とうというときに、夏目が声を上げた。

「様子を、見に行こう」

誰も、否定の声を上げなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5196y/>

とある、夏休みのデキゴト

2011年11月18日05時52分発行